



一貫コース通信

「歴史から学ばなければならないと言う事考」

この所の降雨は観測史上記録的な状況が続いて居たのだが、やっと梅雨明けが宣言されて本当に良かったと思う。予定していた安達太良登山も中止を余儀なくされ、事前下見で準備に当たった先生方や、楽しみにしていた生徒諸君には本当に残念至極であったと思う。元々、梅雨はしとしとと降るのが趣だったのだが、今や災害をもたらす豪雨になってしまった。なぜこんな風になってしまったのだろうか？ 思うに、背景として熱力学的見地を考えてみても、地球温暖化に行き着く。そこから一步も逸脱する気がしないのだ。

さて、昨年9月、台風に因る千曲川氾濫の映像から、この紙面で始皇帝の黄河治水の話題に触れた。所謂、渠(運河)を設ける事で、災害を農業生産力に転じ、七雄から抜きんでて中国を統一した話である。しかし、中国史には、これとは真逆の史実も記されてある。災害を人為的に武器に変じ、多数の国民を誅した人が二人居る事を。その一人が蒋介石である。彼は、盧溝橋事件に端を発した日中戦争の2年目、徐州を陥落し、黄河沿いに進撃をしていた日本軍と、この一帯に勢力を張っていた共産党軍を一掃する目的で、黄河の堤防を爆破した。雨季で増水していた黄河の濁流は、河南・安徽・江蘇三省を呑み込み、その被害は日本の九州よりも広い地域に及んだ。記録では、死者数98万人、被害者は1250万人に達したと在る。思うに、この歴史の一コマの要点は、予め惨状が予想出来ていた事にある。解っていてやった事で、卑怯そのものと言って良い。弁解の余地などない。蒋介石の末路・評価は歴史に委ねるが、少なくとも人の上に立てるヒトではなかったのだと思う。私は、二人の権力者を比較したいのではない。ただ、やって良い事と、絶対にしてはならない事を解って欲しいのだ。

話は変わるが、私達の日常は様々な状況の中での生活と言って良い。しかし、穏やかに見える動静すらも、目を凝らして見ると決してそうでない事が多い。時間レベルの動きも在れば、分のレベルで追われる事もシバシバだ。また、時に秒レンジで在る事(例えば点滅する信号前に、待たされている自分)も少なくない。この中で終始冷静でいられるべくもなく、むしろ、ただただ流される方が圧倒的に多い筈だ。しかも、無意識・無自覚で過ごしている事の方が。このセチガラサの中で、自分を失うことなく冷静沈着な視点を保つ事など、とうてい不可能だと思う。少なくとも私には出来ない。だからこそ今の様な外的要因に因って、強いられる機会に、歴史を掘り起こし、そこから学び、自分で何が出来るかを考えるのである。

今般のコロナウイルスの感染拡大は、21世紀前半の史実である。しかし、新聞各紙や著名月刊誌の論調は、多くが今般のコロナ問題だけに限定していない。私の知る限り、14世紀のペストや天然痘、スペイン風邪の蔓延等を掘り起こし、類似の事例として人類が苦難を、如何に乗り越えて来たかを繰り返し記している。この事からも、歴史は単なる過去の記述を超越し、これから先の未来に起こる、様々な事象の預言書と言えなくはない。

